

空海書簡の表現——独創と汎用——

はじめに

平安初期に活躍した空海（宝亀五「七七四」→承和二「八三五」）は、漢字を書記言語の一つとする日本文化・文学に大きな影響を与えた文人である。そうした彼の主要な事績は、いずれも中国文化・文学を基盤にして形成されており、これを前提とした研究が進められ、多くの成果を挙げている。これらの研究に共通する資料の一つが『高野雑筆集』に収められた書簡群であることは言うを俟たないであろう。

これらの書簡は、さまざまな用件や心情を伝達するための手段として作成され、さらには記載内容や相手によって形式や表現に制約が設けられているのである。そのように形式化され、制約されている面があるものの、文学的な表現を取り込みながら潤色が施されている存在でもある。

書簡に見られる、これらの形式化や制約は、さまざまな書儀として類聚整備され、古代日本にも早くから伝来して受容されていたことが知られる^①。当然のことながら渡唐経験を持つ空海の書簡にも書儀に規定されている表現や形式が見られることからすれば、書儀の受容は確実であったと言える。ただし、そ

の実態は十分に明らかされておらず、総体として論じられる程度にとどまるようである。つまり、空海の書簡が書儀といかなる受容関係にあるかについては、表現分析の観点からの考察が十分とは言えないのである。よって、本稿では空海書簡における書儀の受容実態に見通しをつけるとともに、その特性を明らかにすることを目的とする。

具体的には、友人間での書簡往来を十二ヶ月の季節描写を中心に表現する「朋友書儀」（月儀）と、社会身分などに配慮して儀礼的な要素を強く有する「吉凶書儀」との受容実態を精査し、その傾向をあきらかにする。この結果を受けて、書儀の表現を規定通りに運用しているのか、あるいは応用的な運用であるのかを、使用語彙の性格をも考慮しながら考察をおこなう。これらの結果から「風信雲書、從天翔臨」（59^②）、「風信払岩、雲書排窟」（57）、「時因風雲、恵及金玉」（1）、「承籍甚、深思渴」。来風信、払雲霧」（42）などの書簡に認められる書儀に規定されている類型性（汎用性）と文学的な表現の独創性との関係について検討をおこなう。その際、同時代の文人たちの書簡と比較することによって、空海書簡の特性を見出すこととする。これらの一連の考察から、空海が受

西 一 夫

容した書儀の表現と用法との差異をあきらかにして平安初期の漢文書簡にみられる書儀受容の一端を示す。

一 空海書簡の汎用性―規範としての書儀―

渡唐の経験を持つ空海は、直接に中国文化・文学の影響を受けていたはずである。そうした実態は書簡にも相応に指摘しうると推察される。まずは受容の様相を語彙と文書形式（起筆・擱筆）の観点から確認してゆく。

(1) 類型化される語彙

広義の書儀、なかでも「吉凶書儀」においては使用する語彙や文書形式が、社会的な身分や状況などによって詳細に定められている。そのような語彙の検討素材として、相手の書簡をどのようにに表現しているのかに注目することとする。空海の書簡で用いられている相手の書簡を表現する語彙としては、次のような例がある。

伏開_二玉_一檢、已奉_二天私之高深_一。（某相国宛）

伏承_二金_一札、即擬_レ參_二会法筵_一。（宛先不明）

……風吹有_レ便、莫_レ惜_二金_一玉_一。（清修理亮宛）

時因_二風雲_一、惠_二及金_一玉_一。（徳一宛）

久不_レ承_二音_一札、積_二馳仰之惟_一。（甲州の藤太守宛）

「金」「玉」等が用いられていることから、相手の書簡を敬って表現している例と理解できる。このように修飾的な語を用いて相手の書簡を表現することは、以下の例示からあきらかなよう

に書儀にも広く認められるものである。

頻枉_二金_一玉_一、慰諭何深。（『書儀鏡』S.361）

会有使来、兼枉_二金_一玉_一。（『新定書儀鏡』S.363V）

屢蒙_二芳_一札、惠_レ以_二徳音_一。（『朋友書儀』S.5472）

これらの例のみならず、「芳」「華」「琅」などを冠して尊称とする例が書儀には散見し、これらは、大きく次の三つに分類できると言う。

(1) 上下関係を示す

(2) 相手への敬意を示す

(3) 書簡そのものを示す

だとすれば「玉檢」「金札」「音札」は(3)に位置づけられ、下接する語が書簡を示していると理解できる。また「金玉」は(2)となるものの、比喩的な表現と位置づけることができる。

これらの語彙は、「……自_二舎弟廻日_一、忽奉_二芳_一音_一」（徐公祐「義空宛」）などの『高野雜筆集』末尾にある空海以外の唐代の人物の書簡にも指摘できるのみならず、同時代の書簡にも認められる。

辱枉_二金_一玉_一、深慰_二下情_一。

（最澄「空海宛」『伝教大師消息』）

昨日、伏奉_二芳_一旨_一、諸事欲_二成就_一。

（円仁「青龍寺真和尚宛」『入唐求法巡礼行記』）

両者ともに渡唐の経験を有する人物であり、いずれも汎用性のある語彙と言える。その意味では、相手の書簡を表現する語彙は、書儀の用法から逸脱するものではないと言えるだろう。

(2) 類型化される文書形式―起筆表現

次に類型化の例として理解しやすい、起筆部分の表現を検討する。

暮春已暄。伏惟動止如何云々。(東国の某宛)

暮春甚暄。伏惟動止如何。(甲州の某宛)

季春甚暄。伏惟動止如何。(甲州の藤太守宛)

孟春余寒。伏惟動止如何。貧道尋常。(大伴国路宛)

仲秋已涼。伏惟動止萬福。(宛先不明)

これらの起筆部分は大きく二つの部分からなる。すなわち「暮春既暄」「孟春余寒」などと類型化された季節を示す主に四字句からなる文言と「伏惟動止如何」「伏惟動止萬福」など、相手の様子をうかがう部分とからなる。前半の季節を示す部分は、

正月孟春 亦云啓春、初春、早春、春首、
獻春、時寒、餘寒、尚寒。

三月季春 亦云暮春、晚春、時暄、極暄、
暄暄、次云已暄、甚暄、極暄。

二月仲春 春中、蒼景、時漸暄、
已暖、日暖可為極暖。

八月仲秋 秋中、時漸涼、
已涼、甚涼。

九月季秋 日月會於大火、
而斗建戌之辰。 亦云暮秋、徂秋、九秋、三秋、(以下略)

などの書儀凡例から明らかのように、各季を「孟」「仲」「暮」と三分割する二字と、それぞれの季節の寒暖を示す表現(猶寒・甚暄など)とから構成されている。このような起筆表現は「月儀」の起筆部分に多く見られるのである。後半部分は、いずれも差出人(空海)がへりくだって相手の様子(動止)をうかがう(如何)展開となっている。このように起筆を類型化し得る二つの部分を併せ持つのは、次に示すような狭義の書儀(吉凶書儀)の形式を受容している結果と考えられる。

孟冬漸寒。伏惟中丞公動止萬福。〔書儀鏡〕S.329)

孟春猶寒。伏惟官位公尊体萬福。(同右)

仲春漸暄。伏惟公尊体動止萬福。(同右)

空海の書簡は、これらの書儀(吉凶書儀)の形式を受容していると言え、これは中国の書簡においても適確に運用されていることが、次の敦煌文書から知られるのである。

孟冬漸寒。伏惟北宅夫人司空小娘子尊体起居萬福。

(歸義郡時期君者者与北宅夫人書S.2641)

さらに、この傾向は古代日本においてもほぼ同様であったと解してよいであろう。

中冬遠冷。惟玉体平安、冀迄拜礼日、萬福日新。

(尾張宮成過状案落書『大日本古文書』18・109)

仲春稍暖。伏惟大阿闍梨法明道安穩道体康和。

(最澄「空海宛」)

仲春漸暄。伏惟押衛尊体動止萬福。(円仁「張押衛宛」)

ここで留意すべきなのは、相手の様子うかがいの部分において、空海の書簡には見られない「尊体」(S.329/S.2241、円仁)や「道体」(最澄)「玉体」(大日本古文書)など「一体」と類型化できる表現が存することである。いずれも相手を貴った表現であり、書儀の文例でもみられる例である。

伏惟尊師道体康和。

(俗人与道士一書『新集吉凶書儀』P.2646)

伏惟和尚尊師尊体動止萬福。(弟子与和尚尊師一狀、同右)

いずれも社会身分の上位者(道士・尊師)に対して使用する語句として用いられているのである。空海においても、

前承^二尊^一体^三乖^二和^一。(四二)
杪秋夜寒。惟法^三体^二珍^一和。(五四)

などの使用例が認められる。つまり、これらの語句の使用に對して空海は書儀の表現がある程度遵守していると推測することができる。

(3) 類型化される文書形式②—凶書儀の表現

前項の起筆部分にみられるような類型的な表現として、次のような凶書に用いられる表現がある。

信滿至、伏奉^二凶^一諱^三。乍聞^二辯^一踊、吞^レ火屠裂。……豈凶、天不^レ輔^レ仁、双鳥^一飛。痛當^二奈何^一、痛當^二奈何^一。(宛先不明)

凶変無^レ常。承^二東^一鯨一沈、双鳥^二隻^一飛。惟哀痛深。痛當^二奈何^一、痛當^二奈何^一。賢室、年華未^レ秋、奄遭^二此^一風霜。二三幼稚偏露、惟怙。痛哉哀哉。(筑前太守宛)

これらの語彙や嘆きの表現は、早く六朝の尺牘表現にもある程度認められるものであり、いずれも凶書(弔書)の表現として用いられている。

七月十六日、義之報。凶禍累仍。……哀痛兼傷、切^二割^一心情。奈何奈何。遣^レ書感塞。義之報。

(晋王羲之「七月十六日帖」)
……奄聞^二凶^一諱^三、禍出不^レ意。拊^レ心痛楚、肝懷如^レ割。奈何奈何。(晋陸雲「弔^二陳永長^一書」)

……自^レ聞^二凶^一諱^三、痛心割裂。追惟哀摧、肝心破剥。痛當^二奈何奈何^一。(晋陸雲「弔^二陳伯華^一書」)

人が亡くなる凶事を表現する「奉^二凶^一諱^三」「聞^二凶^一諱^三」の「諱」は、原本系『玉篇』では次のように説かれている。

野王案、諱猶^レ隱也。礼記、卒哭而諱。鄭玄曰、諱、避也。説文、諱、忌也。

つまり「諱」は、忌避すべき事柄を意味し、「凶諱」と類似の語と熟語になることで、人の死の知らせを表す「禍故」「凶禍」「凶故」などと類似の意味となるのである。また深い嘆きの表現「奈何奈何」「痛當^二奈何^一」などは『礼記』に基づき、死の嘆きを示す類型的表現として多用されている。これら六朝の尺牘にみられる弔書の表現が唐代に入って整理類型化されて「吉凶書儀」として次のように整えられることとなる。

月日某頓首。凶故無^レ常。賢兄傾逝、貫割^二拔^一氣。哀痛奈何、悲切奈何。賢兄年未^二居^一高、冀保^二榮^一祿、何凶、報^レ施^二無^一准、奄遭^二凶^一喪。(『新定書儀鏡』S.3637)

空海の書簡のいずれもが凶書(弔書)であることからすれば、空海は「吉凶書儀」の文例を十分に理解した上で、これらの表現や形式を受容していると言つてよいであろう。

凶書での嘆きの表現形式は、書簡の形式や儀礼的な内容に関わるものであり、とりわけ「吉凶書儀」自体が社会儀礼的な要素を色濃く有することと密接な関係にある。このような傾向は、すでに指摘した擱筆語「不次」が「吉凶書儀」では凶書に用いる語彙であるとの規定と空海書簡での用法とに矛盾がない事実と異なるものではない。

以上のように、空海の書簡は、文書形式のような巨視的な部分から語彙のような微視的な部分に至るまで、唐代のさまざま

な書儀の形式と表現との影響の下に成り立っていると見えるであろう。それゆえ、中国の文化と文学とをよく学んで、自らの表現の述作に活用できたのである。このような表現や形式の受容の一方で、空海の書簡を詳細に見るならば、書儀や他の書簡には見られない独創的な述作も認められる。

二 空海書簡の独創性―風と雲の表現―

空海の書簡には天象物である風や雲を用いた文例が、以下のように十三例認められる。

- ① 嗟、雲樹長遠、誰堪企望。時因風雲、惠及金玉。(徳一宛)
- ② 關梨僻處遐方、善称与風雲而周晋。(広智宛)
- ③ 雲霞眇然、音札久寂。日夕企之、惆悵于懷。(宛先不明)
- ④ ……此際、披雲箋。先憑手書。如何請付。(梵釈寺永忠から空海宛)
- ⑤ 白雲在天、滄海渺然、夢魂易接。……今因便風、奉此不宣。(大宰府安少弐宛)
- ⑥ 雲樹雖隔、心通何遠。(筑前太守宛)
- ⑦ 從承籍甚、思渴惟深。風信來、弘雲霧。忽開藻、慰調飢。(宛先不明)
- ⑧ 松巖之下、想於白雲之人。(下野太守宛)
- ⑨ ……風吹有便、莫惜金玉。(清修理亮宛)
- ⑩ 風信弘巖、雲書排窟。(東宮大夫宛)

① 風信雲書、從天翔臨。(最澄宛)

② 過此法期、披雲。(最澄宛)

③ 雲樹長遠、常隔人意、忘言契不彫在。(北山座主義真宛)

(1) 「風」の表現

これらのなかで、まずは「風」を含む七文例(①②⑤⑦⑨⑩)に検討を加える。

まず「風雲」と熟語として用いられる①②を取り上げる。①では送られてきた相手の書簡を敬った「金玉」と対をなしていることから、比喩的な表現として書簡を意味していると解することができる。また①と類似した文例として⑨も「風吹」と「金玉」との対応から推せば、同様に解して問題はなからう。

次に②は引用部分の直前にあたる起筆部分に「幽蘭無心而氣遠、美玉深居以価貴」のごとく、優れたものは視覚で捉えられなくても、その価値を失うことがないと述べて、受け取り手である広智が遠く離れた存在であっても、その「善称」は広く知られていることを述べる。この②の「風雲」は、空を自由に行き来する本来の性格を活かして広智の「善称」が広く知られることを表現しているものであり、書簡を意味するものではない。

続いて「風信」(⑦⑩⑪)では、下接する「信」が書簡を想起させる語であり、しかも⑩⑪は「雲書」と対にしたり(⑩)、組み合わせたり(⑪)することによって比喩的に書簡を表現していると理解できる。残る⑤の「今因便風」は、①「時因風雲」の構文と表現との類似関係が認められることか

らすれば、書簡を意味する表現と解して問題はあるまい。つまり、②を除く六文例では「風」を含む表現は、いずれも比喩的に書簡を表現していることになるのである。

このような用法は、書儀では容易に見出しがたい潤色を凝らした文学的な表現^②と言える。空海以前の書簡において「風雲」が書簡の意味を想起させる例としては、次のようなものがある。

瞻望風雲、朝夕嗚咽。

（陳徐陵「在北齊与梁大尉王僧弁書」『文苑英華』卷六七七）

瞻望風雲、但增搔首。

（与知故別久書）『杜家立成雜書要略』

今勒風雲、発遣徵使。

（『万葉集』18・四二二八〜四二三一書簡、大伴家持）

一例目は、遠く離れた王僧弁とをつなぐ存在である「風雲」を遠く見やりながら、容易に再会の果たせない悲しみに嗚咽する自身の姿を描き出す。また二例目も一例目と類似しつつ「毛詩」（邶風）に基づく「搔首」を用いて、相手との再会を待ち望む心情を示している。最後の『万葉集』の例は、天空を自由に往来する存在としてあるのみならず、書簡をも想起させる表現と解し得る。加えて、いずれもが書簡末尾の表現として機能している事実は見逃せないであろう。

② 「雲」の表現

続いて「雲」が単独で用いられている六例（①③⑤⑥⑧⑩）の検討をおこなう。

① 嗟、雲樹長遠、誰堪企望。

③ 雲霞杳然、音札久寂。

⑤ 白雲在天、滄海渺然、夢魂易接。

⑥ 雲樹雖隔、心通何遠。

⑧ 松巖之下、想於白雲之人。

⑩ 雲樹長遠、常隔人意、忘言契不彫在。

これら「雲」の例とともに用いられている「長遠」「杳然」「隔」等は、書簡を贈答する両者が遠く隔てられている状況を示している。つまり、「雲」は対象を隔てる存在として用いられているとの特徴を指摘することができるだろう。加えて、③が起筆部分に用いられていることを除けば、いずれもが書簡末尾の攔筆部分にみられる例であり、容易に対面の果たせない状況感を嘆く文脈に用いられているのである。

かかる「雲」の表現は、「朋友書儀」に頻出し、しかも攔筆部分に認められるのである。

辺城日遠、塞外年深。白雲斷晋地之書、行恋千山之遠恨。

（八月仲秋『朋友書儀』P.2505）

仰望白雲、心歸故里。俯思素友、情想追尋。

（八月仲秋（答書）同右）

「白雲」が辺塞の地にある者とを隔てて書簡贈答もままならないこと（雲斷晋地之書）を嘆き恨む心情が対句に寄って表現されている。また、このような書儀に見られる「雲」が隔てる存在として用いられている例としては、奈良時代にみられる次のような書簡の攔筆部分にも認められる。

和白雲之什、以奏野鄙之歌。房前謹狀。

（5・八一二書簡、藤原房前）

藤原房前の「白雲」と⑧「想_三於白雲之人」とは、前者の宛

先が大伴旅人（大宰帥）であり、後者が下野太守（人名未詳）

といずれも高貴な人物に宛てた書簡であることから推せば、

「白雲」によって隔てられた相手を思いやる表現と解して問題

なからう。なお、④の「雲箋」は、最後の「手書」と対応して

いると理解できる。さらに「雲」に下接する語（箋）が書簡を

想起させることからすれば、「風」を含む表現と同様に比喩的

に書簡を意味していると解することが可能な例となる。なら

ば、空海の書簡に見られる「雲」を単独で用いる例の多くが、

「朋友書儀」の文例に倣っていると言えらるだろう。かたや、書

簡ではあまり用いられない「風雲」の語を、先立つ書

簡での用法とは異なり、起筆部分に用いて相手の書簡を意味す

る表現としている傾向が認められることとなる。

以上のように空海書簡の表現を独創と汎用（類型）という観

点でたどれば、次の二つの起筆表現が、空海の書簡において従

来の表現を用いながら独創的な表現へと昇華させているとの位

置づけができればよい。

⑩風信_{〇△△}弘_{△△△}巖、雲書_{〇△△}排_{△△△}窟。（東宮大夫宛）

⑪風信_{〇△△}雲書、從_{△△△}天翔臨。（最澄宛）

「風」「雲」の表現と形式とを起筆部分において、相手の書簡

（来簡）の意味で比喩的に用いているのは、従来の書儀・尺牘

に例を見出しがたいものとなる。このような類型表現の改変部

分に、空海書簡の独創の一端を認めることが可能と言えよう。

三 汎用と独創のあいだ——同時代の漢文書簡——

さいごに、空海と時を同じくして活躍した文人や僧侶たちは

どのような書簡を記していたのか。彼らの書簡と比較すること

によって、空海の書簡表現の特性を見出すこととしたい。ま

ず、空海と同じく渡唐経験を有する最澄（神護景雲一「七六七」

弘仁十三「八二三」と円仁（延暦十三「七九四」貞観六「八六四」

との書簡の起筆部分を取り上げる。

最澄は空海宛の二通を示す。

孟夏漸勢。伏惟遍照闍梨瑜伽導体安和。

孟春猶寒。伏惟遍照闍梨導体安和。

円仁については渡唐期間に書かれた書簡を示す。

披展改_レ歲、德音希聞。勤積増深。春景已暄。伏惟押衛尊

体康裕。（円仁、崔押衛宛）

季春極暄。伏惟使君尊体動止萬福。（円仁、使君宛）

いづれも、すでに見てきたように、書儀の起筆に倣った内容とな

っている。加えて僧侶宛の書儀文例として、以下のようなもの

があるのは参考となる。

久不_二頂礼_一、但増_二瞻仰_一。初伏毒熱、惟闍梨導体勝常、

弟子世綱未_レ除、諸昏不_レ滅。

（与_二僧尼_一書）『書儀鏡』S361）

頂奉雖_レ近、馳_レ誠実深。春首尚寒、伏惟和尚法体勝常。

（俗人与_二僧人_一書）『新定吉凶書儀』E2648）

書儀文例との近接は明確であり、その類型性は高まっていると捉えて問題なからう。

また、平安文人たちの書簡として小野道風（寛平六〔八九四〕
〜康保三〔九六七〕）と藤原佐理（天慶七〔九四四〕〜長徳四〔九九八〕）
の書簡起筆は次のようになる。

道風謹言。一夜欲^レ參候之間、早承^レ歸駕之由、悚鬱^レ
強。伏願^レ恩察。幸甚々々。(道風)

道風謹言。今朝他行之間、辱賜^レ御馬、恐幸兼^レ半。(道風)

佐理謹言。離^レ洛之後、未^レ承^レ動靜。(佐理)

平安中期に活躍した文人たちの書簡では、「謹言」「幸甚々々」
等が書儀の文例にも指摘できる表現である。その反面、詳細な
形式や語彙の対応は容易ではないと考えられるのである。以上
のように限られた文例ではあるものの、大筋の傾向としては見
通しをつけることができよう。

空海の書簡表現の特性を明らかにするために「風」「雲」を
用いた表現に焦点化して考察を進めてきた。規範とすべき文例
や書簡表現との共通項を有しながらも、相手からの来簡を表現
するに際して空を行き交う風や雲を書簡に取り込んでいる背景
としては、書儀の受容のみならず、海彼の文学表現を意識して
いるであろう事実は動かないと言える。

来簡を表現するために風や雲を用いる場合には、自らの書簡
に対する返簡を乞う目的のために擱筆部分に用いられてきた類
型的な比喻表現を、来簡そのものを意味する表現として起筆部
分に持ち来したことが、空海の獨創性の一つと言えよう。しか
も「風」を用いた表現には書簡を表象する傾向が単独的な用法
と複合的な用法とを問わず認められるのに対して、「雲」につ
いては両者を隔てる表現を基本とする書儀文例との類似の用法

が見られる一方で、雲を含む熟語の傾向から書簡を示す用法が
存したとも推察できる。かたや「吉凶書儀」などの文例や實際
の書簡や尺牘に用いられている表現が空海書簡には散見するの
である。だとすれば、空海の書簡では風や雲の表現を除けば、
大部分の表現は汎用性を有しており、獨創的な表現が随所に認
められるとは言い難いのではないか。これは贅言するまでもな
く、書簡は形式や規定された表現を用いることで、相手に伝え
たい要件を正確に伝えなければならぬからである。文飾をこ
らせば凝らすほどに要件の伝達性や正確性が希薄化してしまう
のである。それだけに平安初期の漢文書簡では、類型化された
表現によって意思疎通が行われていたと推察されるのである。

おわりに

書簡の規範性や形式は、贈答する両者の社会性を示すために
形成されてきた。それゆえ唐代に完成をみる書儀では、身分に
応じた語彙や形式がさまざまな場面に対応できるように具体的
な文例として示されている。渡唐の経験を持つ空海は、それら
の文例に直接的に触れる機会がさまざまな場面であったと推測
できる。その結果が彼の書簡の汎用的な表現として表出してい
ると言える。これは忠実に書儀を理解して利用できた結果と捉
えることができよう。かたや優れた文人であったことから、唐
代を中心とする詩文を受容した結果が、風や雲を用いて文飾を
凝らした書簡の起筆表現として表れていると位置づけ得る。

書簡は相手との関係を意識し、かつ確実に要件を伝えるため

に作られるものである。空海もみずからと対象の関係を逸脱しない規範性のなかで書簡を記していたはずである。そうしたことが、類型的な形式を基本的な骨格としながらも、文人としての才能を部分的に示したのが「風信帖」等にみられる独創性なのであろう。

空海を中心とする平安初期の漢文書簡は、類型化（汎用化）された表現を軸として意思疎通がおこなわれており、独創的な表現はわずかな部分にとどまっていたのである。

（令和元年九月朔日稿）

付記

本稿は筑波大学日本語日本文学会第41回大会（平成三十年十月六日、筑波大学）でのパネルディスカッション（テーマ「語り」の視点―主観と客観の在り方をめぐって―）における報告をまとめ直したものである。報告後に名誉教授の湯澤眞幸先生より有益なご助言を賜った。末尾ながら御礼申し上げる。

また、本成果は「海外敦煌書儀・六朝尺牘文献の古代日本へ受容実態の解明」（基盤研究B、代表者西一夫）、「日本古代における詩文表現の展開に関する基礎的研究」（基盤研究C、代表者白井津子）ならびに「空海の漢文書簡にみられる書儀及び正倉院文書表現の受容実態の解明」（奈良女子大学大和・紀伊半島学研究所一般共同研究、代表者西一夫）の助成を受けたものである。

注

- ① 山田英雄「書儀について」（『日本古代史攷』岩波書店、一九八七）、丸山裕美子「書儀の受容について―正倉院文書に見る『書儀の世界』―」（『正倉院文書研究』第4号、一九九六）等参照。
- ② 注釈的な研究としては、高木神元の一連の著作等（『弘法大師の書簡』法蔵館、一九八一、「空海と最澄の手紙』法蔵館、一九九九、「唐僧義空の来朝をめぐる諸問題』『空海思想の書誌的研究』法蔵館、一九九〇等）において、各所で敦煌文書の書儀との関連が指摘されている。
- ③ 空海の書簡番号は、高木神元「空海と最澄の手紙」（法蔵館、一九九九）に拠る。以下同じ。
- ④ 張小豔「敦煌書儀語言研究」（商務印書館、二〇〇七）、第六章第二節参照。
- ⑤ 丸山裕美子「敦煌写本『月儀』（『朋友書儀』）と日本伝来『杜家立成雜書要略』―東アジアの月儀・書儀―」（『東洋文庫論集』第七二、二〇〇九）の定義による。
- ⑥ 王尊壽『吐魯番出土文獻詞典』（四川出版集團巴蜀書社、二〇一二）では「尊貴的な身体。書信用語、主要用於尊長的書信中」と解説する。」
- ⑦ 例示したように「高野雜筆集」所収の書簡でも数例の使用例が認められる事からすれば、偶発的に用いている可能性もあろう。とは言え、同時代の最澄の書簡にも使用例があることから推せば、空海にとっても既知の表現であったことに違いはないと考えられる。
- ⑧ 語彙の認定については、注①の張小豔著書の他、伊藤美重子「敦煌書儀の中の凶書」（『ああ哀しいかな―死と向き合う中国文学―』汲古書院、二〇〇二）、楊莉「敦煌凶書儀にみる『死』の表現の語義に関する考察」（『奈良大学紀要』41号、二〇一三）を参照した。
- ⑨ 吉凶書儀における社会身分と書簡の形態などについては、吳麗娛「唐礼摭遺―中古書儀研究（商務印書館、二〇〇二）の『下編 礼儀編』に詳細な考察がある。また張小豔「敦煌書儀語言研究」（商務印書館、二〇〇七）でも書儀の表現に即しての検討が行われている。
- ⑩ 拙稿「書儀・尺牘の受容―起筆・擱筆表現を中心に―」（『萬葉集研究』第30集、瑞書房、二〇〇九）参照。
- ⑪ 文例の掲載順は、『高野雜筆集』の所収順による。
- ⑫ 書儀の文学的な表現については、「朋友書儀」に関して趙和平が『朋友書儀』の信札、酷似齊梁時の名篇。（『敦煌写本書儀論略』『敦煌写本書

- 「儀研究」新文豊出版公司、一九九三」と捉えたり、「可見其与斉梁時書札的淵源關係、換言之、《朋友書儀》是齊梁文風影響下產生的作品」（敦煌写本《朋友書儀》殘卷整理及研究）と述べるように、「朋友書儀」には六朝詩文との関わりが認められる部分がある。
- ⑬ 拙稿「大伴家持と池主の贈答」家持の戯歌を中心に」（『萬葉』第一四八号、一九九三）参照。
- ⑭ 藤原房前の書簡に見られる「白雲」については、「白雲を隔てた遙かかなたの筑紫から贈られて来た旅人の歌」（『新編 日本古典文学全集 万葉集』頭注）参照。
- ⑮ 本文はいづれも久曾神昇『平安仮名書状の研究』（風間書房、一九七六）による。

（にし）かずお 信州大学